



八 田 教 授

## 略 歴

昭和 9 年 3 月 浦和高等学校高等科理科乙類(イ)卒業  
昭和 12 年 3 月 東京帝国大学工学部機械工学科卒業  
昭和 14 年 8 月 東京帝国大学助教授 (工学部勤務)  
昭和 17 年 6 月 航空研究所員に兼補  
昭和 19 年 7 月 戦時研究員  
昭和 28 年 4 月 東京大学助教授兼大学院数物系研究科機械工学課程担当  
昭和 29 年 4 月 工学博士 (論文題目:火花点火機関の性能に関する一研究—主として燃焼に関連して)  
昭和 29 年 7 月 東京大学教授 (理工学研究所)  
昭和 31 年 8 月 東京大学教授 (工学部) に併任  
昭和 45 年 11 月 東京大学宇宙航空研究所長および東京大学評議員に併任  
昭和 46 年 4 月 東京大学院工学系研究科委員会委員  
昭和 46 年 11 月 東京大学大学院協議会委員

その間東大工学部, 教養学部, 群馬大学工学部, 商船大学海務学院などの講師や, 塩業審議会, 資源調査会, 工業生産技術審議会, 航空技術審議会, 学術会議力学連絡委員会, 学術会議中央選挙管理会, 航空審議会, 航空宇宙技術研究所運営委員会, 航空工場検査国家試験委員会, 航空機工業審議会, 技術士試験委員会, 測地学審議会, 宇宙開発委員会, 中央公害対策審議会, 工業技術協議会, 産業技術審議会, 産業構造審議会, 航空事故調査委員会などの委員や臨時委員をつとめた。また昭和 39 年日本機械学会副会長, 昭和 43 年日本航空宇宙学会会長にえらばれ, また学会理事, 委員長, 委員など多数つとめた。

# 停年退職にあたって

八 田 桂 三

停年退職するにあたり、図書出版委員長より何かかけとの御命令をうけ、やむをえず筆をとりました。工学部機械工学科学生第二学年の頃から、現在の22号館原動機部の建物に出入して実験などをさせて戴いておりましたので、その時から数えると東京大学に約40年程お世話になった事になります。敗戦前と申しますか戦時中と申しますか始めの約10年間は工学部が本務で旧航空研究所が併任でしたが、事実上は航空研究所の方に入りびたっておりました。戦争がひどくなるに従い、ピストンエンジンの改良や丁度新しく始った許りのジェットエンジン、ラムジェットエンジン、(両方を当時加熱噴流推進と呼んでおりました。)やロケットエンジンなどの具体的試作開発などに関係させられ、忙しくきりきりまいをしていた様ですが、研究または学問的には全く空白に近い状態だったと申せましょう。敗戦と同時に航空は研究はもとより教育まで禁止され、私は本務の工学部にもどり航空(原動機専修)学科学生に在籍中暫定的に設けられた工学部内燃機関学科の助教授を経て機械工学科の蒸汽原動機の助教授として約10年間をすごし、この間は研究所とは全く関係ございませんでした。サンフランシスコ条約がむすばれ、航空の禁止がとけるに伴い、東大としては工学部に航空学科を復活すると共に、旧航研解散後そこに作られていた理工学研究所に航空部門を増設する事になり、その頃総理府の航空技術調査団の一員として世界各国の航空原動機関係の研究開発状況や施設を調査して参った関係などから、理工研における航空原動機部門の再建を命ぜられ、工学部から理工研の教授に転任して参りました。その後10数年間工学部航空学科の教授を併任いたしたりしましたが、とにかくそれ以後約20年間は、研究所の名前こそ理工学研究所から航空研究所に、更に宇宙航空研究所にとたびたび変わりましたが、変わったのは名前だけで同じ所で勤めさせていただいたわけです。まがりなりにも40年間東大に勤めさせていただけたのは一に先輩、同輩、後輩の皆様の御芳情のおかげで、心からお礼申し上げる次第です。この様に戦前、戦後を通じかなり長期間、工学部と研究所の両方をかけもちしておりましたので、生来のさぼり屋にとり都合な両方へのさぼる口実ができ、さぼって許りで今かえりみて恥かしい次第です。その後、柄でもない所長を勤めさせていただき全職員の方々に非常なお世話になり、全く研究所の皆様には御厄介のかけっぱなしで申訳ございません。私が東大にお世話になった時代が、丁度私の専攻いたしておりました内燃機関、殊に航空原動機の歴史での激動の時代で、航空用ピストンエンジンの我国での開発の初期時代からその終焉まで、またジェットエンジンやガスタービン、それに戦後は直接は関係しませんがロケットエンジンの、本当の開発の初期から今日の隆盛にいたるまでの様子をまのあたりみたり体験したりする事ができました事は、ある意味では幸運だったと申せましょう。また私自身は殆んど何も寄与できませんでしたが、理工研航空原動機部門再開後、非定常内部流体力学に力を入れるべき事を提唱し研究所の浅沼、田中、谷田、小竹、工学部航空学科の岡崎、塩入、高田、梶の諸君が大きい成果をあげられた事は小生にとっても一つの思い

出です。何れにしても私ごとき者に長い東大生活を許していただけたのは皆様のおかげで、何とお礼を申し上げてよいか判りません。

現在の心境をざっくばらんに申し上げますとほっとしたと云う気分と将来に対する不安な気分とが入りまじっています。ほっとしたと云うのは最近は全く研究らしい研究もできず第一線の方々について行けないのにも係らず、研究所の教授と云う席をのうのうと占めている事に絶えず申しわけない気がしながら日々をすごして参りましたので、その良心の可責から解放されると云う事です。今後の不安と云うのも自分の能力がなく皆様のおかげで何とかごまかして来た様な次第ですので、上に申し上げました事と根本的には同じ理由によるものと云えるものと思えますが、始めに申しのべました様に大学卒業以来東京大学許りで生活し、それ以外の世間を全く知らぬ一種の片わなお坊ちゃんですので、今急に東京大学と云う傘を離れて一人ぼっちで世間に出て行く事の不安です。10年位前には停年を早くしろなどと申した事もありましたが、人にもよると思いますが私の様に気の小さい者には60才にもなって未知の世の荒波に向って船出するのはやはり心細く、またおっくうな気がいたします。しかし今の世の中、何もせずに生きて行く事も許されませんので、縁があって東海大学に勤める事になりました。大分なれぬ講議をせねばならぬ様で、以前30才台は研究に専念し、40才台は研究と共に大学院の講議をし、50才台には学部講議をするのがよい等と申した事もおぼえているのですが、さてしばらくはなれていた講議を現実にはせねばならぬとなるとどの様にしたらよいか途方にくれています。これも始めにのべました様に私自身一番学問が身につくはずの30才台を戦争にかまけ只忙しく過ごし全く学問的空白にすごしたむくいとあれば、自分自身でまいた種とていたしかたのないことです。何れにせよ恥かしい事ですが東海大学の講議や具体的教育にも自信がなく心細くおっくうに思っております。中央公害対策審議会の委員や同大気部会自動車公害専門委員会の委員長として自動車排出ガス規制問題できりきりまいをしている時には、忙しすぎて心細く思う暇もありませんでしたが、思えば人間と云うものもいかげんなものです。どうやら一人前に停年性うつ病になっている様です。

何はともあれ何れにしましても、今後は色々の方面で従来にもましてお世話になる事と存じますので、どうかお忘れなくよろしくお願い申し上げます。

1975年3月20日 原動機部